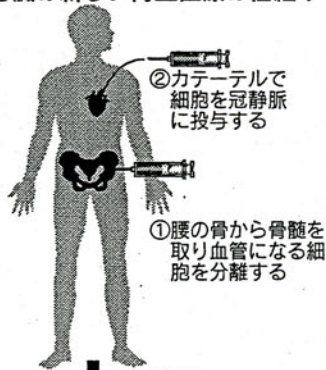


心臓の新しい再生医療の仕組み



②カテーテルで細胞を冠静脈に投与する

①腰の骨から骨髓を採取し、骨髄を細い血管に分離する

↓1~2カ月

心臓の血管が再生し、血流が回復

心筋梗塞の再発防止

日本大学医学部の齋藤頼(と)教授らは再生医療による心臓病治療の新たな手法を開発した。医療機器会社グッドマンと共同で専用のカテーテル(細管)を開発、これを使って心臓の機能を回復させる細胞を患部に集中投与する。開胸手術の必要がなく、心筋梗塞(心臓)の治療後に病気が再発するのを未然に防ぐ治療法として活用できるとみている。

心臓血管、開胸せず再生

機能回復促す細胞カテーテルで投与

日大など

齋藤教授らは学内の倫理委員会の承認を得て昨年十一月、六十七歳の男性に初めて新治療を実施した。男性は心筋梗塞の手術後十年以上たち、動脈硬化が進んだことで心臓の筋肉(心筋)の働きが弱っていた。二カ月以上経過したが、心筋の血流量が増え経過は良好と

いう。年内までに約十人の患者に適用し治療効果を検証する。新治療法は患者の骨髄から血管に成長する単核球細胞を採取、専用カテーテルを首のあたりから挿入し、心筋を取り巻く冠静脈を介し心筋機能が弱った患部に投与する。再生医療で心臓病を治す試みは国内でもすでにいくつもある。ただし、いづれも血管再生などを促す細胞がきちんと働くよう開胸手術で患部に直接投与しなければならず、患者への負担も大きい。専用カテーテルには治



大阪大学の澤芳樹教授(心臓血管外科)の話。冠静脈から(血管再生を促す)細胞を投与するというのが今回の治療法によって、再生医療の適応となる。治療果が上がるよう定期的に血液の流れを変え、仕組みがある。血液が流れていく。核球細胞を投与、ゆっくりと患部の心筋周辺に定着させることが可能になった。

大阪大学の澤芳樹教授(心臓血管外科)の話。ある程度症状の軽い患者には効果が期待できるのではないか。有効性については治療効果の検証を見守りたい。